小城の歴史

阿弥陀堂物語

岡本　澄雄

建久二年（一一九一）関東の武将千葉常胤は源平合戦の功に対する恩賞として源頼朝から晴気庄の地頭職を賜わって以来、千葉氏が代々小城地方を所領として君臨した。

その千葉常胤は現在の千葉県当時の国名上総に一大勢力を確保し歴代の千葉介を名乗っていた。千葉家の当主は他国からの侵略にも勇敢に立ち向かい、鎌倉幕府の有力な御家人としてかつ又、東国の押えとして重きを成していた。

時代は平安末期、平家打倒の悲願を果たすべく立ち上がった源頼朝に対し、下総権介・千葉常胤は一族を挙げて頼朝に味方し、平家が滅んだ後、千葉介家は東北から九州に至る全国各地（肥前・薩摩・大隅・豊前等）に知行地を有する大々名に成長した。そして時代は下って鎌倉中期、中国大陸の元帝国は使者を派遣して日本に従属を迫ったが、これに幕府は激怒して使者を斬殺。元は朝鮮半島との混成軍をもって博多に攻め寄せて来た。幕府はただちに博多海岸に石塁を築いて防ぐ一方、文永8年（一二七一）九月、九州に所領を持つ御家人の九州下向を命じた。

（異国警護番役）

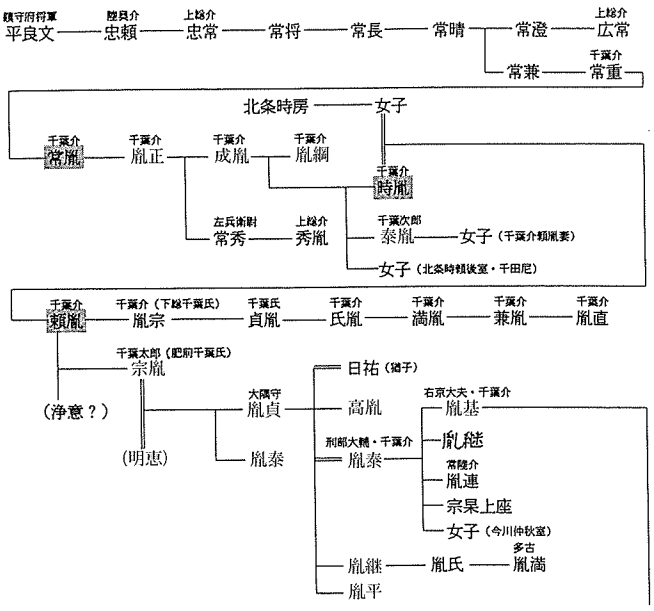
千葉介家も肥前国小城郡に所領を持っていた事から、例に漏れず所役を命じられ、千葉介常胤より六代目の千葉介頼胤が博多の防備に就くこととなった。しかし元寇「文永の役」（文永十一年十月・一二七四）によって頼胤は毒矢の傷がもとで、建治元年（一二七五）八月十三日に亡くなった。肥前叢書によると「去ぬる文永年中、蒙古の武備として当国に下りてありけるが、同十一年の冬、蒙古と相戦ひ疵を被り、其手疵癒えずして翌八月十三日、小城に於いて歳三十七にて失せぬ。云々」とある。

さて、頼胤の父・時胤は源頼朝から幕府開設の第一の功労者と言われた千葉介常胤から五代目に当たり上総の国において東国の押えとして治政に当たった。『千葉大系図』によると、仁治二年（一二四一）（仁治三年九月十七日・二十四歳卒去とも）その遺骨を小城郡平吉保内阿弥陀堂に納め、影像を造り千葉寺に安置するとある。

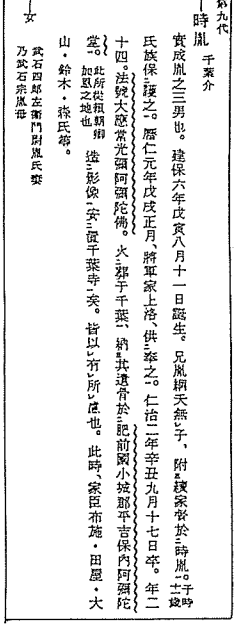
（下総国千葉寺―真言宗）ところでその平吉保内の阿弥陀堂とはいったいどの場所なのか、又どの寺院なのか検証してみたい。

まず始めに平吉保とは現在のどの町に当てはまるだろうか。当然ながら芦刈町はその全ての地域が該当するが（ただし、約七六〇年前の海岸線は東は下古賀～舎人～浜中辺りと推測される）牛津町の全てが該当するとは限らない。文化八年の平吉郷絵図によれば、牛津本町（現・大字牛津）・牛津新

※ 千葉氏系図



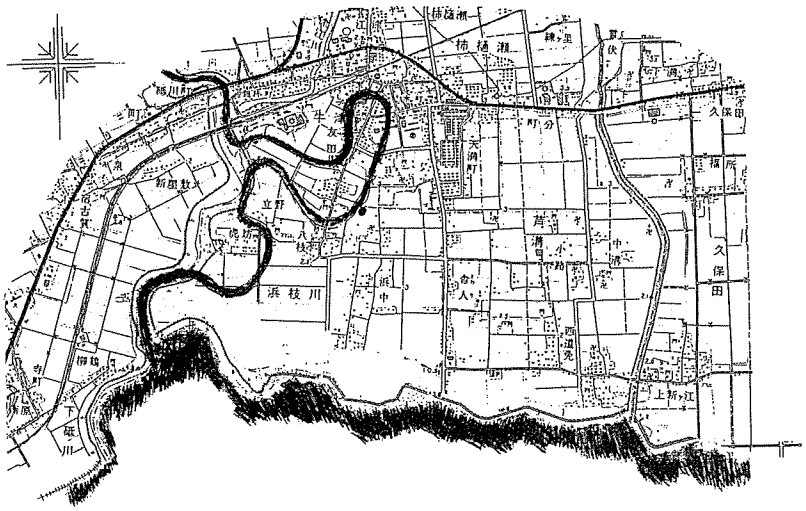
※ 千葉大系図によるところの時胤



第九代
時胤　千葉介
寅成胤之三男也。建保六年戊寅八月十一日誕生。兄胤綱夭無子、附=頼家卿於=時胤=。于時氏族保=護之=。歴仁元年戊戌正月、將軍家上洛、供=奉之=。仁治二年辛丑九月十七日卒。年二十四。法號大慈常光彌陀彌陀佛。火=葬于千葉=、納=其遺骨於=肥前國小城郡平吉保内阿彌陀堂=。此所從祖朝卿造=彫像=、安=置于千葉寺=矣。皆以=此所=所=住也=。此時、家臣布施・田屋・大山・鈴木・猿氏等。
女
武石四郎左衛門尉胤氏妻
乃武石宗胤母

町（現・字新町）・友田村（現・字友田）・定原村（現・字天満町）・柿樋瀬村（現・字柿樋瀬）・練ケ里（現・字練ケ里）・江津村（現・字江津港町）の以上の区域が小城郡平吉郷に属するとある。では、その地域の中で阿弥陀堂とか千葉氏が信仰した日蓮宗の寺院又は、臨済宗の寺院若しくは千葉寺の宗派・真言宗はないであろうか。

※ 鎌倉初期（13世紀初頭）頃の平吉郷推定地形及び牛津川の流れ



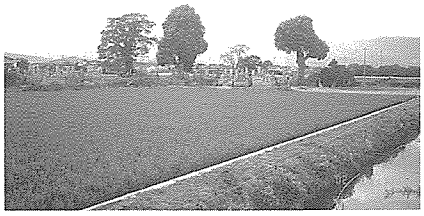
始めに芦刈町内の寺院について検証してみたい。現在町内に所在する寺院は十一ヶ所存在する。その十一ヶ寺の開山年を寺院毎に列挙すれば以下のとおりである。

1、中溝　宝泉寺　永禄年間（一五五八～一五七〇）
2、中溝　永林寺　萬治元年（一六五八）
3、小路　永明寺　元亀年間（一五七〇～一五七二）
4、小路　円心寺　寛文二年（一六六二）
5、小路　福田寺　永禄二年（一五五九）
6、小路　己身寺　約二九〇年前（宝永・正徳年間）
7、下古賀　光楽寺　永禄年間（一五五八～一五七〇）
8、八枝　観音寺　延宝二年（一六七四）
9、浜中　報恩寺　元禄年間（一六八八～一七〇三）
10、牛王　常光寺　明治二十年（一八八七）小路より移転
小路の常光寺は元和年間（一六一五～一六二三）
11、牛王　妙長寺　昭和二年（一九二七）三日月立石より移転
三日月の妙長寺は応永二十七年（一四二〇）
12、小路　安養寺　文化八年にはすでに廃寺
13、小路　真中院　文化八年にはすでに廃寺
14、小路　福寿寺　文化八年にはすでに廃寺
15、浜中　秀蓮院　廃寺・時代不詳
16、葦刈の経阿弥陀仏　小城町岩蔵寺過去帳に記載在り
17、芦刈洞明庵　小城町岩蔵寺過去帳に記載在り
18、葦刈修明庵　小城町岩蔵寺過去帳に記載在り
19、川越　源久庵　勧請年月不詳
20、浜枝川　清東院　勧請年月不詳（牛津町史にも記載あり）

1～11まではいずれも近世の開基であり、時胤の遺骨が小城郡平吉保内の阿弥陀堂に納められた仁治二年（一二四一）とは三百年から四百数十年の開きがあり年代的には重なり合わない。しかし、12～20まではその開基は明らかでない。

平吉保という地名からして芦刈町の全域及び牛津町の一部に限定される事は間違いない。始めに若し、芦刈町内の寺院であったとした場合三つ程の候補を掲げる事ができる。

① 小路の常光寺は元和年間（一六一五～一六二三）の開山と伝えられているが、千葉氏大系図に記載されている時胤の法号『大応常光阿弥陀仏』からして、又、常光寺の開基和尚の法号『常光』からしても元小路に在った上の常光寺ではとも考えられる。つまり、考えられる事は小さな阿弥陀堂という堂宇があった跡に後世寺院が建立され寺の名前も常光寺と名づけ、又開基和尚の法号『常光』もそれによったものではと。


①上の常光寺跡

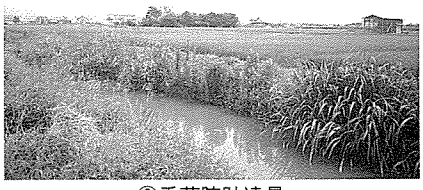
② 二つ目の説は、芦刈（当時の平吉郷）を知行した徳島治部大夫義胤は時胤の七代後胤に当たり、ましては福田寺は西芦刈を領していた豪族・徳島氏の菩提寺であったが、その創建は永禄二年（一五五九）であり、年代的にも約三百年の隔たりがある。しかし、福田寺の西にかってあった安養寺・真中院・福寿寺（いずれも文化八年には廃寺となっている）いずれかの寺院ではと推測される。その理由は①で述べたように、小さな阿弥陀堂という堂宇があった跡に後世、安養寺・真中院・福寿寺の寺院が建立されていたが、後、新し

②福田寺並びに安養寺他二寺院跡の遠景

く福田寺という寺が永禄二年に創建され三つの寺は併合されたのではなかろうかとも推測される。さらに、千葉氏が引具した士の氏姓として寺尾、原、宮崎、水田、土肥（土井）があるが、どの氏姓も福田寺の近くの大字芦溝字小路に集中している事も一つの要因ではないだろうか。

③ 最後の説は、浜中部落の北方に所在する秀蓮院について検証してみたい。平清盛が日宋貿易の拠点としたのは神埼郡でありその港は南へ約十キロ程下った筑後川下流の諸富津であったという。千葉氏の拠点は小城であるが、その港は干満の差が著しく昭和の初めまで大型船が出入りしていた牛津の牛津江付近ではなかったろうかと推測する。又、芦刈町史の伝説によれば秀蓮院の傍に観音丸と言う船が沈んだと言う言い伝えが残っている。その事から当時の河川は秀蓮院の傍に蛇行していたと考えてよい。つまり、河川に近い所に阿弥陀堂を建立してそこに納めたのではなかっただろうか。その理由としては、鎌倉幕府創設の恩賞として肥前小城の地と薩摩の島津庄及び入山庄等の地に建久二年（一一九一）源頼朝から地頭職を与えられた地であるという。その事から言える事は遺骨を小城の地に納める事よりも海岸に近く目前の有明海を南に下れば薩摩にたどり着くこの地に定めたのではなかろうか。その当時の海岸線を推測すれば、小路の天満宮の創建が文献によれば鎌倉時代初期の建暦・建保（一二一一～一二一九）の頃とあるように、すでに天満宮や福田寺付近、そして西の浜中辺りも自然陸化されたところであった。

以上、地図上及び町史における寺院の沿革や開山年等検証したが、



③秀蓮院跡遠景

時胤の遺骨が納められた「阿弥陀堂」がどこであったか約七六〇年経過した現在見つける事は出来なかった。

次に、牛津町内での平吉郷に属する地域に所在する寺院であったとした場合を掲げてみると、その平吉郷に属する地域は牛津本町・新町・練ケ里・柿樋瀬村・江津村・友田村・定原村（天満町）の以上が該当する。

※ 平吉郷内における牛津町の地域

1、新町 黄檗宗星巌寺末 **円通庵** 二五〇年前
2、新町 日蓮宗光勝寺末 **大乗庵** 勧請年月不詳
3、本町 浄土真宗西本願寺派 **正満寺** 三〇〇年前
4、友田 黄檗宗星巌寺末 **輪王庵** 三〇〇年前
5、天満町 臨済宗東福寺派 **平安寺** 永禄二年（一五五九）
6、江津 臨済宗東福寺派 **寿泉寺** 勧請年月不明・天文九年以前
7、江津 宗派不詳 **天福庵** 永禄年間（一五五八～一五七〇）
8、柿樋瀬 臨済宗南禅寺派 **宝積寺** 勧請年月不詳・天文四年以前
9、柿樋瀬 臨済宗南禅寺派 **意楽寺** 勧請年月不明・元禄以前
10、江津ケ里 臨済宗南禅寺派 **円長寺** 抱所に阿弥陀堂あり
11、柿樋瀬 **長泉寺** 沿革不明
12、柿樋瀬 **天福庵** 沿革不明
13、天満町 **清東院** 牛津町史に記載在り（芦刈町史にも記載）
14、江津ケ里 **春江庵** 円通寺の末寺・廃庵・勧請年月不明
15、江津ケ里 **龍門庵** 円通寺の末寺・廃庵・勧請年月不明
16、江津ケ里 **地福庵** 円通寺の末寺・廃庵・勧請年月不明
17、江津ケ里 **秀江庵** 円通寺の末寺・廃庵・勧請年月不明

阿弥陀堂が若し、平吉郷でも牛津町内の寺院であったとした場合三つ程の候補を掲げる事ができる。

①大乗庵

②意楽寺

① 新町の**大乗庵**は牛津町唯一の日蓮宗寺で、本尊は日蓮上人、勧請の時代は不明であるが、牛津江の河川が傍に流れ込んでいる処から考えると、芦刈町の所の③で述べたように若干の期待があるものと思われる。又千葉氏が信仰した日蓮宗の寺院でもある。

② 柿樋瀬の**意楽寺**は南禅寺派の臨済宗であり、勧請の時代は不明である。しかし、鎌倉時代と思われる古色蒼然たる五輪塔が数基あり千葉氏一族の墓と言われている。その五輪塔が千葉時胤のものかその後の千葉家に繋がる者のものな

のか定かではない。しかし、重要な候補地の一つと言える。

③　江津ケ里の円長寺は南禅寺派の臨済宗で小城三間寺円通寺の末寺であり、本尊は阿弥陀如来である。慶長以前の宗派は天台宗であったと言う。尚、記録によると同寺の抱所の一つに満江村の阿弥陀堂があるが、その阿弥陀堂が時胤の項に記載されている阿弥陀堂ではないだろうか。しかしながら、八百年経た二十一世紀までこの事が伝えられた記録も伝承もなく、その場所も何処か定かではない。文献上のみではここも重要な候補の一つである。

以上、地図上及び町史における寺院の沿革や開山年等検証したが机上では確たる証拠も見出せなかったので、現地に出向き検証するもおおよその推測は出来るが確証の域を出なかった。

③円長寺

（芦刈町三王崎在住）

阿蘇惟直之墓・考（一）

古賀　次郎

はじめに

佐賀平野の西北部に連なる山並の主峰として「天山」があり、その天山の頂上に「阿蘇惟直之墓」があることは、この地方の人々にはよく知られているようである。

この件については、先に「小城の歴史」の中で金丸盛登氏による稿文が載っている。当然重複する個所もあるが、また違った観点からの歴史面を主に「阿蘇惟直之墓」について記事を進めてみたい。

鎌倉幕府が倒れ、所謂「建武の中興」が成り立ったものの、建武三年（一三三六）足利尊氏が反乱を起こし、新田義貞らに京都で敗れ、西下し九州へ落ちて来た。これを迎え討つべく、宮方であった肥後の菊池、阿蘇氏一族らは筑前多々良浜に戦ったが武運つたなく敗れ、退散の止むなきに至った。

阿蘇一族は退路を糸島方面から天山々系を越え肥後を目指したが、地元小城の千葉氏が足利方であったがために、阿蘇の軍勢は奮戦の甲斐もなく再び敗れ、此処を最後に散った。その折の状況や死に場所などについては諸々の記録や諸説があり、今となっては、その真相を知るべくもないが、残っている諸説を拾い集め、不確実また僭越ながら私が調べ得た範囲内のことも併せて述べて行くことにする。

・天山の頂上は小城町を始め多久市、厳木町、富士町との境界線が交わっている関係から夫々の市町も歴史上の記録として残している。

◆「小城町史」

「阿蘇軍は退路を糸島方面にとり、阿蘇惟直、惟成、惟澄ら三人と軍勢二百余人は退却し、本国へ志さんとして、天山を越えて肥前国へ迂路を取ったが、すでに小城の千葉氏は足利方に味方していたがために、未だ多くの軍勢を擁し奮戦したが、衆寡敵せず、この地に於いても敗れ、一同は、阿蘇の噴煙を見つつ自刃し悲壮なる最後を遂げた」と、先ず書き起し、続いて「北肥戦誌」「太平記」を引用し、その状況を紹介している。

また別に、小城公園・忠魂碑の西後方に「阿蘇惟直碑」が東向きに建っている。この碑の篆額は有栖川熾仁親王の揮毫に係り、碑文は阿蘇惟治の撰で、明治十九年、阿蘇惟敦が建碑し、その内容は、漢文による長詞・漢詩からなる撰文も併せ紹介している。

・ここで先ず、他の記録、諸説にも主として引用されている「北肥戦誌」「太平記」の内から、関係する部分を紹介しておく。

◆「北肥戦誌」

「…大将の武敏（菊池）、痛手を蒙りしかば、相戦ふに事叶はず、筑後國へ引退き黒木の城に取り籠る。秋月備前守は太宰府まで落ちたりしが、直義朝臣（尊氏の弟）の軍兵共の頻に慕ふに返合はせ、一族廿餘人、皆一所にて討死す。阿蘇の大宮司は、兄弟三人郎従二百人本国へ志し、肥前国小城山を越えし処に、千葉大隅守が所領の郷民共、雲霞の如く集りて、落人通さじと取籠むる。阿蘇が兵、是を防いで山上より大石を余多落し掛け、打破りて通らむとす。地下人、事ともせず、千鳥がけに石を除け大宮司と相戦ふ。大宮司が者共、皆闘ひ労れてければ百六十余人矢場に討れ、大将大宮司八郎惟直、同弟次郎大夫惟成（ある書に光直と）一所に討死す。其の弟惟澄も二ヶ所疵を蒙りしが、当の敵十四人切伏せ、慕ふ者を追ひ払い、兄の死骸を舁せて辛々肥後へ帰りぬ。」

◆「太平記」

「…コレノミナラズ、阿蘇大宮司惟直ハ、先日多々良浜合戦ニ深手ヲ負ヒタリケルガ、肥前ノ国、小杵山（ヲツキヤマ）ニテ自害シヌ。舎弟九郎ハ、知ラヌ里ニ行キ迷テ、卑シキ田夫ニ生ラ（イケドラ）レヌ」

関連する他の資料とその周辺

◆昭和十年十二月「佐賀郷友」の中で、小城郷土史家、故・太田保一郎氏は「…阿蘇惟直は肥前国小杵山にて自害し、弟九郎惟成は知らぬ里に行き迷ひて、生捕られ自害せり。また九郎堂及び近くにある立中社など晴気の松葉一帯のものは、それら阿蘇一族を祀るものであろう」などと書き、「小城の歴史」第十四号にも再掲されているが、九郎堂は小城町史などが示す如く、天山神社の創建に関係した藤原房前（九郎安弘）真楯父子

を祀り、立中社は千葉胤連に討たれた千葉胤頼を祀った処である。

◆「富士町史」

「太平記」などを引用しつつ、凡そ「小城町史」の内容に程近い記事を述べると共に、後記の阿蘇文献にも出る内容であるが、阿蘇惟直は後醍醐天皇からの「阿蘇一円御寄進」の綸旨を錦の袋に入れ所持していたが、敗走の時、山中谷合で失い、土地の百姓に拾われ、古湯の女姓地頭のもとに届けてあることが分かり、後年、即ち建武五年「牧秀廣起請文」（別記す）となり阿蘇大宮司に届けられたという変わった一説が特に目を引く。多々良浜への出陣に際し、肌身につけて所持していたその「綸旨」が、阿蘇神社に現存していることから、事実無根とは云えない。この牧秀廣のことを「富士町史」は、大宮司の郎党と書き、阿蘇の資料では当時小城郡に住んでいたと記している。おそらく落人の一人でもあろうか。杉山や市川一帯も小城郡に属し、住まいの所在は不明のままである。

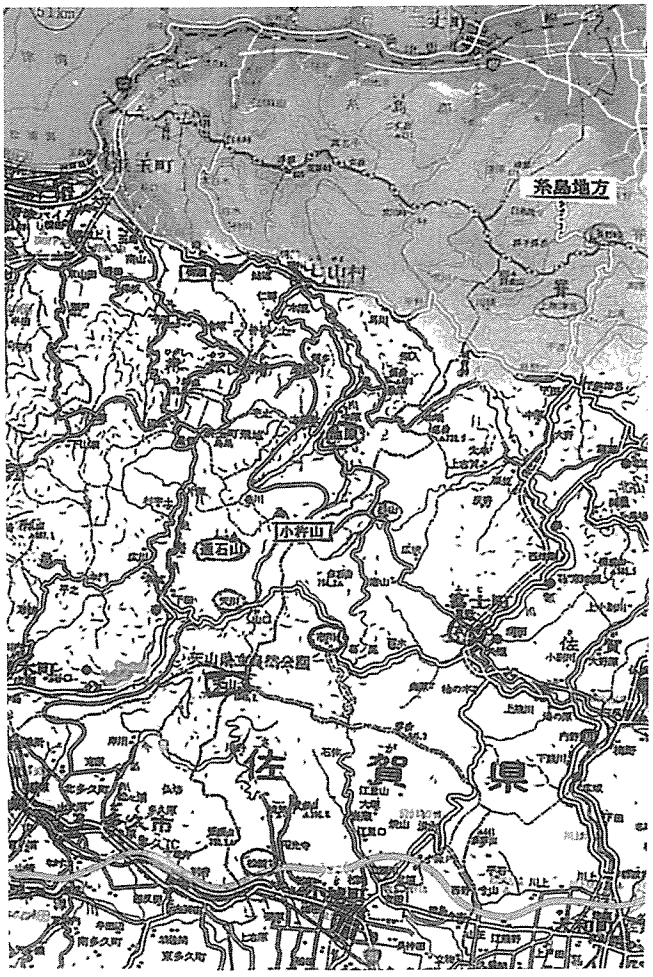
また「九郎神信仰」という見出しの中に、「大宮司八郎惟直の弟・九郎惟成は、傷身を原隼人の背に依り古湯にきて、温泉の効で回復し、九郎堂を建立し永住したという。原隼人の子孫たちにより『九郎さん祭り』が行なわれていた」との記事もある。（古湯の淀姫神社境内には九郎神社と記銘のある大きな石碑が現存する）

◆「多久の歴史」

（昭和三十九・五・一発行）

「阿蘇の軍は二日市方面へ退却の予定であったが、尊氏方に圧せられ、天山を越え浜崎を経て肥後に帰ろうとした。しかし小城の千葉の兵に遮られ入り乱れて山岳戦を展開した。それが今に残る晴田の古戦場である。惟直は天山神社の東手・硯粉までのがれ、『死骸は我が故郷阿蘇の噴煙の見えるところに埋めて呉れ』と頼んで自害した。従者はその言に従って天山の頂上に葬り、残った二十余人は阿蘇へと下山の途中、千葉の兵に遮られ、皆奮戦して倒れた。延元三年、里人は哀れを感じ、憚りつつも死骸を埋葬した。これを三つ塚といって今も残っており、硯粉には惟直を祀った地蔵がある。千葉を憚って千把焚（せんばたき）地蔵と称した。

また唐津の隈本家系には、惟直（惟成？）は松浦郡柳瀬にかくれ永住して隈本家の祖となるとしている。なお南山村（現・富士町）市川の伝説では「九郎惟成は白坂峠にて殺さる」とあるなど別説も含めた諸説伝記が書いてある。



関連の地図

三社大明神（松葉）

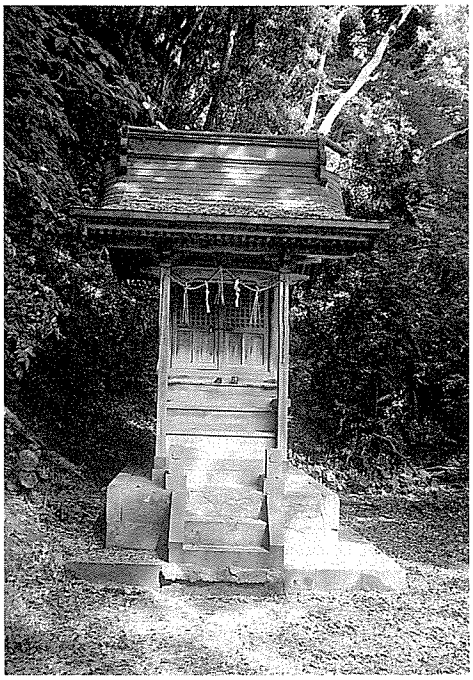
これらの中で小城に最も深い因縁をもつ「硯粉地蔵」と「三つ塚」については、晴気方面の古老たちなどに深く尋ね回ったが、そのことを識る人には出合えなかった。しかし尚も念のため「硯粉地蔵」などにつき多久市の市史編纂室にも尋ねたが、当時の関係者が既に不在であり、確かめることは不能であった。これが書かれてから、四十年近くなるが、当時の古老たちによる単なる伝承とも思えるが、「多久の歴史」は斯の如く述べている。しかし、阿蘇の残兵はあくまで故郷を目指し、晴気の松葉付近まで奮戦して来たこともまた事実らしく、他にも阿蘇軍兵の墓が此処にありと伝える文献も見られる。現在もなお松葉の飯塚宅裏には「三社大明神」とした割に立派な石祠があり、「肥後の国・阿蘇大宮司臣従・菊池氏戦死於此地」の陰刻が確かに読める。（註・電話帳によれば阿蘇一帯には菊池姓が沢山ある）この「三社大明神」が「三つ塚」との関わりを私は深く感じている。建武の時からは悠に六百年を遥かに過ぎているが、その子孫の方が、態々お参り頂いたこともあると聞き、その心情に深く感じた。

（以下次号）

（遺稿）

小城・大楠神社について

岩松　要輔



◎その由来

小城町・須賀神社には楠木正茂を祠る大楠神社が抱宮としてある。幕末、小城藩士柴田花守が外国船来航などによる国難を除くために、南北朝時代の忠臣楠木正茂の像を作り、中町の天満神社に祠り、ついで須賀神社（祇園社）に奉納したものと伝えられている。

昭和九年の建武中興六百年記念にあたり、楠木正茂を祠る神社の調査が全国的になされ、官幣中社鎌倉宮宮司座田司より小城須賀神社社司陣内不可止に調査依頼があった。陣内社司は、十分な資料がなかったため柴田花守との関わりの深い東京市牛込区五軒町三八の神道実行教管長柴田孫太郎（花守の孫）に照会したところ次のような回答が寄せられた。

小城藩士柴田花守は、弘化三年（一八四六）異国の軍艦長崎に着きたる由云噪くにぞ、其状見て参るべき旨内々の仰こと承りて立出ける、駅路は国々へ知らせのはゆま・使節、櫛の歯の引きもきらず、長崎へおしゆく軍人、すさまじき事いふばかりなし。

剣とり筆かきすつる時にあひて
　我か命毛のをしけくもなし

と詠じ、又、

橘正成卿と題して
雲さわき競ひふりくる五月雨に
　はな橘をくたしつるかな

と詠じ、又、

桜井永訣と題して
橘の花はちりても御代のため
　かくのこのみを遺しける哉

と詠じあり候、弘化・安政の頃は人心恟々、物情騒然たるものありし折とて大楠公崇敬欽慕の念止みがたく、遂に御社内に御木像安置の挙に及びたるものあらんかと存じ候。

陣内社司は、これによって小城・大楠神社の由来を座田宮司に報告した。佐賀県神社会長光田信よりの幣帛料五円も到着し、社殿の新築と建武の中興六百年祭の準備に入った。

◎大楠神社祠殿落成と六百年祭

昭和九年三月、後醍醐天皇・建武元年より六百年にあたり、建武中興六百年記念会が全国的な規模で挙行された。小城町においては、記念事業として大楠神社の祠殿建設が企画され、特に小城町在住の右近ヌサ、七田ツキ、今泉レキ、増田ワカ、村岡クニ、小柳サトの六女史が発起人となり寄付を募り、昭和十年十二月、須賀神社の境内で大楠神社落成式と楠公六百年祭が執り行われた。記念講演を在町の太田保一郎氏が行い六女史の功績を讃えた。須賀神社陣内不可止社司の尽力でこれらの行事がとどこおりなく実施された。

（小城町西小路在住）

弥生文化研究の基礎資料
古代東肥前文化資料集成

木下巧氏（本会前会長）編著の『古代東肥前文化資料集成』が本年五月に刊行された。佐賀平野及び白石平野の弥生文化を網羅した大著である。

唐津地方についてはすでに『古代末盧文化集成』（木下巧編著・昭和五十六年刊）があるが佐賀平野における弥生文化を一眺できるものとしては、『佐賀県考古大観』（松尾禎作著・昭和三十二年刊）以来約四十年ぶりとなる。

本書に集録した遺跡は、肥前風土記に云う「郡」を単位としてまとめている。古代国家生立の過程を示唆してくれるであろう。

本書は、氏の自費出版であり書店では販売していない。希望される方は左記までに申し込んでください。

小城市小城町一八二（木下方）
肥前文化史研究会
本体七五〇〇円
B5版六四六頁
遺跡数七二、カラー写真六頁
モノクロ写真五七〇点

平成十七年度小城郷土史研究会総会

平成十七年五月二十二日（日）小城市立歴史資料館研修室にて、平成十七年度の総会が行われました。

総会前に七田忠昭氏による「吉野ヶ里遺跡の発掘からみえてきたもの―有明海が育んだ佐賀の弥生文化―」と題した記念講演会がありました。吉野ヶ里遺跡や周辺遺跡の発掘調査成果から、弥生時代の佐賀平野社会の様子を話されました。

総会では、十六年度の事業報告、十七年度の予定の説明があり承認を受けました。

題字揮毫
小城市議会議長
徳田　芳照氏

小城の歴史　第52号
発行　小城郷土史研究会（小城公民館内）
代表　岩松　要輔
編集　田久保佳寛
　　太田　正和
発行日　平成十七年九月三十日
印刷所　（株）音成印刷